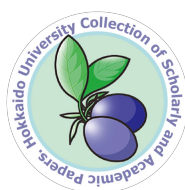




Title	大阪大学外国学図書館蔵「とりかへはやの物語」（第二冊）翻刻・その2
Author(s)	小林, 理正; Koboyashi, Tadamasa
Citation	北海道大学文学研究院紀要, 177, 1 (右) -30 (右)
Issue Date	2025-12-24
DOI	https://doi.org/10.14943/bfhhs.177.r1
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/98613
Type	departmental bulletin paper
File Information	06_177_Kobayashi.pdf



大阪大学外国学図書館蔵「とりかへはやの物語」(第二冊)
翻刻・その2

小 林 理 正

—

本稿は、前稿「大阪大学外国学図書館蔵「とりかへはやの物語」(第一冊) 翻刻・その1」(「北海道大学文学研究院紀要」一七六号、二〇二五年七月)につづき、同本・第二冊、すなわち『とりかへはや』巻二に相当する巻の翻刻を行うものである。略書誌および凡例は前稿に記載のとおりで、そちらを参照されたい。

【翻刻】

とりかへはやの物語 二の巻(外題) 表紙

とりかへはやの物語 二の巻「(内題)」扉

【二】

よし野の山の峯の雪おほつかなからぬほとに／ふみならし給ふ御うらみさへとくるよなきほとなから／月日もはかなくて過行まゝに女君の御うふやのほと^屋／にも成にけりおそろしくあやうきことにおほしさはきて／ひまなき御ときやうすほう大殿にもあやしなから人目／例ならず見せしとそへはしめられたる御いのりとも殿の／うちひまなきまでこちたきしるしにやかねてより／はれくしからすのみなやみわたり給ひしをいと、／たひらかにをかしけなるをんなにて生れ給ひぬるをおほし／つるほいのことく行すゑかみなく思ひやらるゝさまにて／おはするをいみしき事にとゝおほしよろこひ御うふやの／きしき有さまかきりあることに事をそへいそきさはき／給ふさまことはりにも過たり

(1丁オーウ)

【三】

大殿よりも御ゆとのゝことなと／まておほしやりたるさまこちたきをかひくしう／まちとりはやし給ふにすへてたかふ所なくたゝ宮の／宰相なるちこの御かたちなるにされはよとうち見るに／むねはつふれてうとき人にたにあらて

むかしよりへた／つる事なくかたへにまつはれたる人にしもいかにあやし／ともをこかましとも思ふらんとはつかしく心うきに／むねいたきまで思ひあまりこもちの君いみしかりつる／ことのなこりわたなとうちかつき所せけなるにくゝみふせ／られてね給へるにさしかゝりてものけ給はるとある声に／うちおとろきて見あけ給へれたゝなる時たにいみ／しうはつかしけにおほろけの人と見えにくきをまい／て思ふ心ありうちほゝゑみてこれはいかゝ御らんする

中納言

この世には人のかたみのおもかけを我身にそへて哀とや見ん

とのたまへるはつかしけさに何事かはいはれ給はんかほ／ひきいれ給へるもことはりなりやいてやさはれかくて有／はつへき身ならはこそ世の人の見思はん言の葉を／きゝいれられ奉るもあいなしすへて我身のよつかぬ／おこたりのみこそ思ふにもいふにも尽せぬこゝちすれと／泪さへおつるをさはかりもてさはかるゝにゆゝしと見る人／もこそとわつらはしければ立のきぬるなこりもをんなの／御心のうちそいとくるしうきえぬはかりなれと人はいかてか／おもひしらんひとつによるこひて殿うへ御ゆとの大将／とのゝうへむかへゆなとめてさはかるゝに中納言の御あり／さまのあまりすさましうと目とゝむる人もあれと人／からのあまり思ひすましさまあしからすもてしつめ／給へるけなめりとぞ見なしける

(1丁ウゝ2丁ウ)

【頭注】

○この世には／子をかねたり

【三】

七日の夜大將殿の御うふ／やしなひにてかந்தちめ殿上人残りなくまゐりつとひ／たるに宮の宰相のみそいたはるこ
と有てまゐらぬいか／にと人しれす思ひまとはれし事を平らかにねんし／なしても人のうへにうちきゝてはるかにい
ふせきにおほし／あまり左衛門かつほねにおはしけりかはかりの契りをおほし／しらぬにはあらしたゝこよひ夢はか
りとせめまとひ給ふ／をいとわりなきこと、思へといと心くるしきにのほりて見れば／人／は皆いてゐたりおとな
しき人はたいはん所の／かたにてとかうことおきておほうへのろくなと見給ふ／事ともありて我御かたにおはしなと
してこもちの／御方中／こよひゆてなとして人すくなにてふし／給へり中／さもありぬへきまきれかなと見て御
との／あふらなととかくまきはしていれてけり女君いと／折あしとおほしなからあなかなりけるちきりの哀に／
のかるへくもあらさりつるに心ならずもたゝ涙そさき／たちけるいとくらくあらぬほかけにいとさゝやかにほそう／
をかしけなる人の色はくまなく白きにしろききぬ／ともにうつもれてかしらに菊の上おほえてわた／引ちらされたり
こちたく長きかみをひきゆひてうち／やりたるなとかくてこそまことにをかしう見まほし／けれと思ふにおほかたは
かほりみちいみしうなつかし／けなりよろつをかきくつしさはかりくまなく色めか／しき色このみの深くあはれと心
にしめらんことゝも尽／し給ふことのはけしきなにの岩木もなひきつへきに／女君も心つよからすうち泣いていみしう
あはれけなる／けしき^氣にいとゝ立わかるへき空もなし^外には中納言／ひやうしとりていせの海うたふなる声すくれて
おもしろう／きこゆるをあやしかはかりの人を心にまかせて見つゝ／なとてうとかりけんさはかりのかたちのほひ
やかに／たをやきをかしきにはたかひていみしうものまめやか／にあやしきまでもておさめてい^いたうものを思ひ
／みたれたるさまのつねにあるはいかはかりの事を／思ひしめて外にうつらふ心のなからんとゆかしき／ことそかき

りなきや

(2丁ウゝ4丁オ)

【四】

またこともはてぬに中納言きぬとを／人にぬきかけていと寒かりければしのひてきぬ着かふ／とてまきれ入給へるに帳のうちにあきれまとひ／さはくけし⁽³⁸⁾きのあやしさにさしのそき給へれはおき／かへる人は帳より^外に出たるへしいたくさはきて扇／たゝうかみなととおとしたなり女君いみしうおほし／いりてかくさんの御心もつかすやをらよりて扇の枕／かみにおちたるをとし火のもとによりて見れは／赤きかみに竹に雪のふりたるなどかきたるかぬり／ほねにはりたるにうらのかたに心はへあることゝも手／ならひすさひたるその人のなりけりされはよとおもふに／かくまされんとてこぬにこそ有けれと思ふにいみしう／ねたかるへきことのさまなれとさしもおほえす男は／さこそあらめ女はしもいとふかくおはせぬをりといひ／なから今はしめたる事ならねはなかちの人も／しらぬやうもなかりつらんかうなとせうそこしけんものを／かゝるほうちとけいれ給ひつらんはおほろけにおほ／すにはあらぬなめりか人の心さしにまかせて／うれしとは思ひなかなま心おとりせぬやうはあらし／かしいとはつかしき人をかつほうち思ふらんかし／のとかに我なきひまゝも多かるものをかはかり／うちとけ給へるほどのいみしうさはかしうの、しり／たる折しも見る人も有つらん人目こそ我ため人の／ためいみしういとほしけれいかすへき世にかあらん／さりとて此わたりにかきたえなんも人きゝいとかる／し／しざりとてかくのみかたみに人もつゝむましかめるに／しらすかほにてすくさん事もいと心なき事に思ひ／みたれてあそひやなにやかやとあれといたうもて／はやさす此うふやのほと過ぬれは例のよし野山に／思ひ入れてそよろつおほしなくさめけるそのほと／事ともゝいとくた／しけれ

はさのみかきつゝけんやは／

(4丁オ～5丁ウ)

【頭注】

○その人／宰相とさとり給ふ也

【五】

宮の宰相はしのふる道のあふことかたきおもひに／なけきしつみつゝもこれは心をかはしをり／／すぐ／さぬゆきあひに心をなくさみて例のくせはこれは／かきりなけれどひとつことにてのみやは有へきにあらず／中納言のもりきかん所もいとかたはらいたし猶せん／よう殿の内侍の督はしもかきりなくをかしうて人に／心おかるゝふるまひは思ひのとめられけんかしと猶思ひ／なされてまた立かへり宰相の君といふ人をなく／／かたらひつくしていかなるまきれにか有けん御もの／いみかたうてなし壺にもまうのほり給はぬ夜入にけり／

(5丁ウ～6丁オ)

【頭注】

○例のくせ／好色也

【六】

かんの君浅ましういみしとおほすかにももおほえ／給はすさはいとつき／しく心ふかく引つゝみて／うこきをたにし給ふへくもあらずなく／うらみ／わひて明ぬれはいてすなりぬめつらかにかたみにわり／なしとおほせといふかたなくてかたき御ものいみに／ことつけて帳のかたひらおろしまはしもやのみすも／まゐりわたしなとしてしも

なる人うへにもあけす／などして心しりの人ふたりはかりそわりなくおもひ／まとふにをとこは名たかくいはれ給ふ御かたちのゆか／しくいみしとき、思ふ御ありさまなれは見奉らんと／思ふにた、今はよろつわすれたりそはいとちひさくて／あたり所おはせねとくせと見ゆへくもあらず御くしは／糸をよりかけたるやうにゆるらかにこちたうてあなち／にても見つる御かほはた、中納言の今すこしあてに／かほりすみたるけしきそひて心にく、なまめきまされり／あちきなく心をつくす中納言の女君こそあてにをか／しけにこまかになつかしうらうたけなる事そ似るもの／なき此御有さまはにほひそめてたく目もあやなるひかりそ／こよなかりけるかしと見るに心きも、つきはて、うらみ／わふるにおほかたはいみしうなほ／とあてになまめか／しうあゑかなるけしきなから更にたはみなひくへう／もあらす心をまとはし涙をつくしてその日も／くれ其夜も明ぬへきにおほしわひかんの君もいみはて／ぬれは殿もまゐり給ひ中納言もおはしなんをかくて／のみにとわりなかるへきをまことにふかき御心ならば志賀の／うらをおほいていて給ひなはいかにうれしからんといひ出／給へる聲のわりなくあいきやうつきたるほともた、中納言／なりけりめつらしういみしきにさへき、まとひいと、／いつへきこ、ちもせず／

宰相

のちにとて何をたのみにちきりてかかくてはいてん山のはの月

めつらかなるわさかなともいひやらす／

内侍のかみ

志賀の浦とたのむることをなくさみてのちもあふみと思はましやは

わか君よしみたまへとそうつくしうのたまふにあやにく／ならんもわりなくてたましひのかきりと、めおきてからの／かきりなからいてぬ

(6丁オ―7丁ウ)

【七】

その後かきたえ御ふみの返り事／もなく雲井にもてはなれ給へるにすかしたされ／奉りしことのねたく悲しくやしきにまた此比は／ほれまとひてもものゝひまもやとうちにのみさふらへは／中納言のまゐり給ふを見るに露もたかぬかほつきの／かれはあてになまめかしう心にくきけしまさり／これははな／といまめきてこほるはかりのあいきやうそ／すゝみ給ふらんかしとも見るにむねつふれて思はん處も／しのはれすほろ／と泪のこほるゝを中納言も／いとあやしとおほしたれはいはけなくよりへたてなく／みなれそなれて今はかくしもあはれに悲しさのやる／かたなきにみたりこゝちのうちにはへくるしうのみなり／まさればなからふましきなめりと思ふにつけてみたれ／まされば心よはくめゝしきやうに侍るそやとおしのこふ／誰もちとせの松ならねとおくれさきたつすゑの露の／ほとこそ哀なるへけれといひても心のうちにはいかに／我ををこかましとも見思ふらんとはしたなれとなつ／かしううちかたらふ

(7丁ウ～8丁オ)

【頭注】

「すゑの露の」―引哥／○末の露のものと雫やよの中のおくれさきたつためしなるらん

【八】

かくのみ思ひわひてひとつ心に哀を／しるかたとてもかたみに心のみこそかよへわりなき人目の／関をあなかに／はゝからす見きゝついたらんことも／なのめならしいとほしうはつかしかるへければかたみに／いみしうつゝみ給ふほとにあひ見ることは夢よりも／けにいとほかなくかたし今ひとかたはたすかし出され／にし後今はいよくもては

なれつれなきにまことに／枕より跡より恋のせめくるこゝちして^(池)ひたり右の／袖をぬらしわひつゝ、かた／＼のかたみ
と中納言のいと／見まほしかりければすゝろなるやうなりともいかゝはせんと／おもひておはしたれはいてさせ給ひ
ぬとてなし壺の／かたを見いれてあゆみすゝみてはいらまほしけれとかひ／なければうちなけきていつち出給へるそ
と問へは大殿／におはすときこゆれはそなたさまにおはしたり

(8丁オ―9丁オ)

【九】

大かた／にはしのひて例の中納言のかたなる西の對に忍ひ／やかに入給へれはいとあつき日にてうちとけときちらし
て／ゐたりけり見つけていとふ^(不)ひんにむ^(無)らいにて侍るにとて／にけ入給ふにあか君たゝさてといふにきかねは女もな
き所／なれは心やすくてつゝきて入たれはまことは見くるしうと／うち笑ひてついぬみたりこゝちのあしきにたい
めんの／久しくなるはいみしう恋しく心ほそければわざと／たつねまありつることゝうらむれはわりなしやなめけな
る／にといふをおのれもくるしきにさて侍らんするそとてさうそく／とけはさうはよかなりとてゐたりすゝしきかた
にひるの／おまししきてうちやすみてうちはせさせて物かたりなと／するに中納言のくれなゐのすゝしのはかまに白
きすゝし／のひとへ着てうちとけたるかたちのあつきにいとゝ宮は／にほひまさりてつねよりもはな／＼とめてたき
をはしめ／手つき身なりはかまのこしひきゆはれてけさやかにすき／たる色の白きなどは雪をまろかしたらんやうに
／白うめてたくをかしけになるさまの似るものなくうつくし／きをあないみしかゝる女の又あらん時わかいかはかり
心／をつくしまとはんと見るにいみしうものおもはしうて／みたれよりてふしたるをあつさにてうるさかれときかす
／

(9丁オ―ウ)

【頭注】

「枕より跡より」―引哥／○枕よりあとより戀のせめくれはせんかたなみそとこなかにをる

【10】

物かたりなとして暮ぬれは風す、しくうち吹秋／來にけるけしききことにおほゆるにいとおこすへくも／あらず内侍のかみの御かたにも露の御せうそこつた／ふる人もなくこ、らのとし比の思ひむなしく成なは／我身の跡なくなりぬへきよしをいひつゝ、けてうらむる／さまのいみしう哀なるに此わたりにもかくそいひけんかし／けに女にて心よはくなひかてはえあるましくもあるかな／さてもうしろめたのわさやしのひてもさはかり日比心に／なひかしはて、はそれをもたなきことに思ひなきてあひ／もあはぬ恋のひとつにてもあらず又かくそへておもひ／いふよいかにひまなき心のうちならんとくるしき心もさま／／あつかはるゝにしのひかたくて／

中納言

ひとつにもあらしなさてもくらふるにあひての戀とあはぬなけきと

うちほゝゑみたるけしききにてまきはすけはひなといと／すくよかにおしはなちて見るめてたさはものにもあら／さりけり身にちかくうちそひてすくよかならすみたれ／たるなつかしさにさらにあひての戀もあはぬおもひも／皆なくさみぬるこゝちして思はしういみしきにいと／ほしさもさしおかれていとゝかきいたきよせられて／

宰相

くらふるにいつれもみなそわすれぬる君に見なるゝほとん心は

ともいひやらすうるさければそまたのもしけなかなりたれ／にもはなれぬかたみとしもおほさるらんと起るをさらに／おこさすまことはあなもののくるほし殿のおまへにのたまふ／ことありつれといみしうあつかりつれはうちやすみ侍

り／にしいそきたちてまゐらねはあやしとおほすらんまつ／まゐりてこんとて起るをいかにおほゆるにかあやにくに
／引わかるへき心ちもせずあか君とつとらへてわりなく／みたる、をこはいかにうつし心はおはせぬかとあはめい
へと／き、もいれすさはいへとけたかくもてなしすくよかなる見る／目こそ男なれとりこめられてはせんかたなく心
よはきに／こはいかにしつることそと人わろく涙さへおつるにさても／めつらかに浅ましくとは思ひながら哀に悲し
き事かた／／の思ひをひとつにかきあはせつるこ、ちしてあやし／など思ひとかめられんもことのよろしき時の事
なりけり／

(10丁オ―11丁ウ)

【二】

残るくまなく見つくしつと思ふにかはかり心にしみて／おほゆることのなかりつるかなとおほゆるそ心まとひの／ひ
とつなるにくらされて浅ましかりけるなとおもひ／わかぬけしきなるを中納言はいかに思ふらんと悲しう／世にな
からへてつひに我身のうきを人に見えしられ／ぬるよと涙とまらぬけしきのうつくしう哀なる事ぞ／似るものなきや
われもなく／今はかた時もはなれても／えあるましきをいか、すへきといひわふるに夜もあけ／ぬれとおきいつへ
きけしきもなし今はいひはした／なめても我身のよつかぬ有さまを見しられぬれば／たけかるへきやうもなし心をあ
らたて、は浅ましき世／かたりにさるへき人とうちいて、もいか、はせんよし野の／宮のたまひしやうにこれも此
世のことならすさるへき／ちきりにこそはありけめと思ひなるにいとめてはなれ／かたければあはれけに人目のいと
れいなきやうなるを／おなし心に相おほして人目見くるしからすもてなし／給は、なんまことに深き御心とはしるへ
き世にうもれ人／しけうなとおほすへき身ならねはいつも／さりけ／なくてかはかりのたいめんはかたかるへき

にもあらずといと／なつかしけにかたらひなくさめていたすもけにさる事と／おもへとたゝかた時もはなるへき心地
もせねはおき別れん／ことのわひしうおほゆれはかへす／ちかひちきりて／からうして出ぬるなこりも夢のこゝち
してなそや／世にきえやしなまし此人に出ましらふもはつかしう／淺ましうもあへれいかにと思ひわつらへと殿うへ
のしはし／も御らんせぬをはいみしきものにおほしたるをと思ふ／にそせて引とゝめらるゝ心地とする

(11丁ウゝ12丁ウ)

【一二】

例のまつうち／ゑみてかきりなき御けしきにうちまほり給ひてこよひは／こゝにものせられつるか宰相の中将のふみ
のこと問ふへき／事ありとてわざとまうて來たりつれはときこえても／むねうちつふる右の大とのゝうちにいみしう
思ひなける／なりや猶人のうらみなくもてなされよとのたまふもかたはら／いたきに人の御うらみ有へきもてなし
ありとも思ひ給へぬ／はとこたへ給ふもことはりなり御まへにて御たいなとまあり／ていて給ふほとにそ宰相のふみ

／
いかにせんたゝいまの間の戀しさにしぬはかりにもまとはるゝ哉

くれさらんにあか君／とそあるうけひき返りことせさらん／も我身いとあやしかるへければ例のすく／しううち
／なきて中納言／

人毎にしぬはかりとはきゝつるもなかきは君かいのちとそ見る

とこと更にかきたる筆のたちとかきさま目もおよはすそ／けさはいと見なざるゝや此くれのあふせをいかにともかゝ

ぬは／いなとやといとわひしければ又たちかへり／

すてはてんいのちはとてもいま更にまたかはかりのものは思はし

右の大殿におはしぬるにそもちてまゐれるいとうるさ／けれと心をやふらしと思ふはかりに／

まして思へ世にたくひなき身のうさになけきみたる、ほとのを

けにとまちとりほろ／＼といと、なかる

(12丁ウ～13丁ウ)

【二三】

すなはち右の大殿／におはしたれと中納言いと人目あやしかるへきにいて、たに／あひなはのかれやらんやうなしと思ふかいとむつかしうる／さければひるよりみたりこ、ちくるしうてえたいめん給はらぬ／かしこまりはこと更にまゐりてなんといとすくよかにいひ／出たりうらめしう悲しきに人目もえつ、みあへすきこえ／さすへきことありてなん猶このさうしくちにさし出させ／給へとのたまへとよろしからんにはいかてかおはしまいたらん／にみつからきこえさせぬやうは侍らんみたりむねいとふかく／におこりて侍るほとなれはといてすなりぬるか悲しう／わひしきにわりなくうち忍ひて哀しる人ももろとも／ならんかしと思ひやらる、に此わたりはかた／＼いとたち／はなるへきかたなきふるさとなれと人目あやしうなりぬへ／ければたちかへるこ、ちもあるにもあらずなけきあかし／つ、

(13丁ウ～14丁オ)

【一四】

中納言もおもくましらひて此人に見えんことのまは／ゆさにみたりこ、ちにことつけてとにもたち出給はねは／宰相の中將日々にたちかへりうらみわひいかに／ととひ／來つ、もかひなくてのみかへるこ、ちいとわひしかりけり／からうしてうちへまゐり給ふとき、給ひて心もさはき／てあり／てうち見給ふこ、ちはとし比もかたらひつく／せとゆきあはさらん人を見つけたらんこ、ちしてこ、ろ／まとひのするなかに中納言もうち見あはせてけしき／ことにかほあかみていみしうもてしつめてものとほく／すくよかにてなれよるへくもあらぬによそに見る心地／猶いみしう心もとなくわひし

(14丁オウウ)

【一五】

御まへにめしありて／まゐりたればちかくめしよせて例の内侍のかみの／御事なりけりうちまもり御らんす中納言のかたちの／いみしうにほひやかに見まほしきを御らんしてかんの／君のいとよく似たりとき、けにこれか髪なかくてけさうし／ひたひかみ長やかにかゝりたらんは天女のあまくたり／たらんもうるはしうこと／しからぬへしこれはけにそ／あいきやうつきはなやかなるさまはならふ人あらしを／などおほしやるに更に御らんせてはあるましくわり／なき御こ、ちせさせ給ひけりけちかくならしては宰相／にこりにたればまめやかにかしこまりていかにもよの／つねのありさまを思ひはなれたるさまをすくよかにそう／してさふらふかあくよなく御らんせまほしければ／むけにいたさせ給はぬを宰相はわかやうに御らんしつけ／たらん時例なきさまにても御よこめあらしと思ひよるに／いつも御らんしつけてはかくのみかたらひなつさはせ給ふと／見しかと日比はなにもと思ひと、められさりしをうしろ／め

たくむねのみつふれてしつ心なし

(14丁ウゝ15丁ウ)

【一六】

からうして御せん／をたち出たれはまちうけて例のやすみ所にする所に／つれてゆくをせめてもえひきもはなれずも
ろとも／に御とのみなとやうにてと、まりぬ此君たちのさふ／らひ給ふ時は殿上人などといと心におもひて／と
のる所につとひあつまるに宵のほとはものさは／かしうむつかしければこまやかなるものかたりのやうにて／いたく
たれをも見いれすなりぬれはとかくゆきわかれぬる／ほとに泣うらみ給ふさまいみしう哀なり人目もいと／あやしか
るへしわか君やまことにあひおほさはいとかく／いちしるくなもてなし給ひそみるめのかたくゆきあふせの／有まし
きことこそかやうにはおほさめ明くれかくさし／むかひ御らんせらるゝにはなにのめつらしきふしにかさも／おほさ
るへきたゝよつかぬをこかましき身の有さまを／こと更にもてかろめ給ふへきなめりとなん思へはいとなん／心うき
とむかひ火つくりてゑんすれはかうのたまふいと心／うくわひしく中／よのつねにあふせかたからんよりは／やる
せなくたゝあやうく悲しきものをかくて見奉るにも／おしはなちもてすくよけ給へるを見るこそ心まとひの何／しも
たとふへきかたなきとてわりなきけしきなれは／けに哀ならぬにはあらねとさりとてかくのみまとはしたて／られて
のみもいとあやしうよつかぬ身の有さまあら／はれぬへければ猶人目見くるしからぬほとにをと契るも／いとたへか
たきことに思ひまとひたりしのひわたりの／事をほのめかしいて、けしきはみなしり侍りにしかと／なにとて我身は
例のやうならてたれをかあやめかほ／ならんと思ひ侍りしかはたゝほれ／しきやうにて／すき侍るをさるへからん
時／はいとほしけなるけしきも／なくさめさせ給へといひ出たるにいみしういとほしけれと／わつらはしき思ひま

しらねは心やすく隔ありては見え／しと思へははしめより有しさまをくはしうかたりて／それに心なくさむましきよしをいふいてあな心うたくひ／なけなりしけしきをかくいふにこれこそは月草の／うつろひやすき心なめれと見るに哀と思はんかきりは／うちほのめかしいふへきにもあらさめり又思ひうつ／ろふかたあらん時はめつらかなることの有しやといひいて／んと思ふにいとろめたうかゝる人にしものかれぬ／ちきりのありけるよと思ふもいと心うし

(15丁ウー17丁オ)

【頭注】

○むかひ火つくりて／かなたよりうらむるをまたこなたよりもものする事也

【二七】

かうのみ／しつゝうちにもいつくにも身をさらぬかけのことく／たちそひたれとまことに思ふ心のゆくはかりのあふせ／はいとかたくのみもてなしつゝおほかたはいとなつかしう／うちかたらひ相見るほとはあやしかりける身のえさらす／のかれさりけるちきりを思ひしりいみしうなひきながら／たちはなれたちぬれはさはいへと心にまかせつへきゆき／あひをさらに心やすくもあらずわりなくありかたう／もてなすもいとわひしう成まさるに思ひわつらひ／しのふる人になと時／はいひすゝめて我はしらす／かほにていとうさりぬへきひまをつくり出てあひ／見るけにいとめつらしうあはれにいみしき心さし／これこそはよのつねのことゝ思へと猶中納言になかは／すきはわけてける心なれは例のことにおほえなりになり／心よはくせめてもてはなれたるさま／のこのみまさ／りてわりなけれとかれにさしはなれたるほと心なくさめに／はたこと人を見るへきこゝちもせずこれはそのまきはし／はかりのむ

つひにや哀になつかしういまはおほかたの／人目はかりをこそつゝめ、中納言のきゝやつけんのおそ／ろしきかたはう
せてありしよりもしけううちほの／めきわたるに女君もこよなく見なれにたる心地して／いとよくなひき哀なるもつ
らき人はまつむね／つふれておほえけり

(17丁オ～18丁オ)

【一八】

中納言此けしきはみなへたて／なく見きゝしり給へればあやしの事ともやとをかしう／もにつかすとうちなけかれ
つゝいまはたまいて女君に／見きゝしるけしきはかりも見せずいつまてかはと思へと／いとなつかしううちかたらひ
て例の月ことのおこること／のあるによりめのとの家の六条わたりなるにはひかくれ／てもなし給ふに宰相は尋ね來
にけるものか間ちかき／柴垣のもとに立かくれて見れはうちしくれつゝ／くもりくらしたるゆふへの空のけしきあは
れなるを／すたれ巻あけてくれなぬにうす色のからあやかさねて／なかめいてたるゆふはへつねよりもくまなくは
れ／と見え／てつらつえつきたるかひなつきなともものをみかきたるやう／にて泪おしのこひて／

中納言
しくれするゆふへの空のけしきにもおとらすぬるゝ我袂かな

いくよしもあらし我身にとひとりこちつゝゝなかめたるうる／はしさ絵にかくとも筆およふへくもあらすまして宰相／
は心まとひまさりてふとよりくるまゝに／

宰相
かきくらし泪しくれにそほちつゝゝたつねさりせはあひ見ましやは

思ひかけぬにおとろかるれとをりはたあはれなれば／

中納言
身ひとつにしくるゝ空となかめつゝゝまつとはいはて袖そぬれぬる

けしきをたにしられてはひかくれひとりなめ給ひける／ほとんつらさをいひやらすかうのみつらき御心なども更に
／えあるまじうなん思ひなりゆくといひつくしつ、いと心／やすき所なれはうちかさねてふしよろつになきみ笑ひみ
／いひつくすことのはまねひやらんかたなし
(18丁オ―19丁オ)

【頭注】

「いくよしもあらし」―引哥／〇いくよしもあらし我身をなそもかくあまのかるもにおもひみたる、

【一九】

明るもしらす／もろともにおきゐつ、見るにちかつくへくもあらずあさやかに／もてなしすぐよかなることこそを、しかり
りけれどもたれたちて／うちなひきとけたるもてなしはすへてたを／となつ／かしう哀けに心くるしうらうたきさま
そかきりなきや／例の人は心ならぬなきむすほ、れなからうちとけぬ／とても猶よのつねなりけりまことに我も人
も見ならひ／たる人の引かへ心くるしうにほひやかにうちなひきたは／ふれもするにけなつかしうやはらかにとけた
るもてなし／はたいはんかたなくこれをいたして、よそに見る時も／あるはいみしきわさかなとひたふるにこめす
ゑてわか／ものに見まほしきまゝ、にとし比は例のをとこの御あり／さまと見るをかくて見奉るはいみしきもの、姫君
よりも／けになんおほゆるをもとの御有さまもさこそはあめるを／今はしのひて女さまにてこもり給ふかくてのみ
は心の／まゝに見奉るへきゆゑにけなき事なれはいみしうなん／わひしきむかしよりかゝる中となりぬれはいみしう
／あるまじきこと、いへとそのひんなきにしたかふこそは／例のことなれあためにもいとあやしき御有さまなりと／
ひたふるに我ものと見なしておきふしかたらふをけに／さる事にはあれとかくさまにて有へくありつきにたる／身の

にはかにさていりぬなんもあやしかるへければさらは／ともえ思ひならぬをうらみ泣つゝふしおきいとおもふ／さまにむねあきて例のこもりぬ給ふへきほとよりも／おほく過ゆくに右の大殿またいかにおほしなけくらんと／おほしやるもいとくるしければ御ふみきこえ給ふ例の心地／つねよりもおこたり侍らねはかくてのみこもり侍るにつひに／いかになりはつへき身にかと心ほそきにそへても／

中納言

有なからあるかひもなき身なれとも別れはてなん程そ悲しき

とあるをこゝにはいかならん御こゝちもうちまかせ給はん／こそよのつねならめ時さしはなれたる御はなれるの／心えすさなんいかなるへき御なからひにかとおとゝなけき／おほし人さもうちさゝめき思へるけしき見え心ひとつ／には身のおこたりを思ひしれはことほりに身のみつらう／はつかしきにかうのみ心をやりて殿のたまふ事も／いとほしうしのふる人もいとありしやうにはいられすなり／にたるをかきつゝけなかめ給ふほとに此御ふみを殿もさす／かにゆかしうおほしてまつひきあけて見給ひてゆゝしき／ことをものたまふかなとつらさもわすれうちなかれて／なとかくのみ心えすあつしうものし給ふらん人からすゑ／の世にはいとあまりすくれてせうこくには過給へるそ／ゆゝしきや御手なとこそかうは人のかきいてぬわさをと／うちかへし見給ひつゝ御返りあはれと見給ふはかりとぞゝのかし給ふにいとゝ心地もおくしぬへきこゝちし給ふや／

中納言北方

うきことにかはかりいとふわか身たにきえもやらてせけふまではふる

いとをかしけにかき給へるをゆかしけなきことなれば宰相に／見せてもあらはやと思ひてひろけさせぬをさなめりと見ながら／あなかちにはひとりて見るにふとむねつふれてさこそいへ見るに／かほの色うちかはりまめたつけしきの猶いみしうもの／ふりけなるを見るにかゝる人をたのみて我身をもて／かへていりぬなんよなとたのもしけなくおほ

ゆるに／宰相は千代の命のひぬるこ、ちしてかたはなるまで／おきふしあそひたはふれて此世ならぬまでちきり／か
たらひてあまり日數のおほく過れば出給ひなんと／するをまたいかにもてはなれことの外なる御けしき／ならんとい
ひかへしてうらむれとさてのみあるへきならねは／こしらへいたして我も所くにてぬ
(19丁ウ～21丁ウ)

【110】

かくのみする／ほとに十月はかりより音なしのさとにこもること、成て／こ、ち例ならずか、らんと思ひよらすた、
いかならんとこ、ろ／ほそくおきふしつ、これはかくれ所もとむへきこ、ちなら／ねは右の大殿におはすれば女君い
とあてはかにらうたけ／なるさましてかうものし給ふほとはよろつ思ひけちて／あたりもはなれすあつかひなけき給
へるを見るにいと哀／なれはなからんのちのしのひ所におほしいつはかりと／おもへと心と、めて哀にうちかたらひ
給ふけしきを父／おと、はうれしう心ゆきて御いのりやなにと立さはき／て思ひあつかひきこえ給ふ女君もまた
た、ならず成給ひ／にけりあまりうちしきりかたはらいたきこと、おほせは／人にけしきもしらせ給はす
(21丁ウ～22丁オ)

【111】

いつかたにも人しれぬおもき／おもひのありそ海ふかきえにしによる浪のよるへさためぬ／ふた所の御もの思ひいと
哀なり宰相はかう例ならて／こもりものし給へはおほよとはかりのなくさめたに人／目のしけからんを思へはふみを
たに思ふ心ゆくはかり／はかきやらすわりなく思ひなけくほとにしはすはかり／にもなりぬふししつみおとろくし

てとちこもりおほしなけせんもいと／ほしうおほゆよつかすなりにける身を思ひしりしほと／より世にはあらてあらはやと思ふ心は深くなりながら／殿うへのおほさん所には、かりて今まで世になからへて／あやしき有さまを人に御らんせられぬること我身のはても／なくしなしつる心うくいみしき事とはな／と／あいきやうつきうつくしけるかたちの露のまよひ／ありてもの思ふへくもあらぬにいみしうおほ、れて／袖をかほにおしあて、泣入給へるか例なき有さま／を思ひとくにはをかしう淺ましけれと見るに七八／尺の髪ひきたれてその道にことはりうけたらん女も／中／何かはせんさまかはりてをかしう哀なる人から／なるに宰相はいと、ことはりなれとすへてこはさるへきに／こそはかうなおほしிரいと泣く／こしらへてけふあす／にても此さまをかへてこもりぬ給ふへきよしをいふけに／かうなからはあるへきことにもあらねはさこそはあるへき／なめれと思ひなるにはましらひなれにたる世の思ひ出多く／哀なることのみはるけやるへきかたなきをもと、して／さはかりいみしう涙をなかしことのはをつくし給ふを／こはけにさ思ふにこそと思ふ

(22丁オ～25丁オ)

【頭注】

「おほよと」―引哥／○おほ淀の浦にかりほすわたつみのみるをあふまでやまんとやする

○つきかへし／悪阻つはり也

○さる人こそ／懷妊の人の事

【二三】

宰相はまたかのわたりに／しはしうちあはれぬなれはいみしきふみをかきつゝも／うつすみなにはあらずともすれ

は此女君に我けしき／見するたひ見せぬたひさしましりつゝうらなきたにも／あらずしのひまきるゝけしきを見るに
此ほとも又／たゝならすなりにたるをかうのみあまたになりたる契り／のほとを浅からすしらるゝなるへしと
見るにたくひなく／一すちならん心さしにてたにかはかりの我身のおほえ／つかさ位をすてゝふかき山に跡絶なんは
後の世の思ひ／やりたのもしきに此世はかへつることにてもそはくやし／かるへきやうなし人からのをかしうなまめ
きたるを／こそ人にことなれかはかりの人に身をまかせていりぬ／なん我身のちきりはいとあかぬことなるへきをま
いて／人の心きはめてたのもしけなくあまりあためきすきて／このましういろめきたゝ、今たに心さしおとらぬさまに
／見えすひきしのふる心いと深しまして今はとこれ／はかりすかし出してつねのことゝめなれてつらき心も見へ／む
時はいかばかりかはものゝくやしう人わらはれるへき／と思ひつゝくるに宰相のかたらひにつかん事は猶いとこの
もし／からすのみ又世にいてましらひすくすへきならねはいか／にも／我身は世にもなくなるとするぞかしと思
ひなるに／をやたちを見奉るにも悲しううちにまゐりまかつるも物／哀に常のことゝ思ふ時こそあれいまひと月ふた
月世には／あるへきと思へは吹風につけてももの悲しう心ほそき事／かきりなし
(25丁オ―26丁オ)

【頭注】

「うつすみなは」――〇ひたたくみうつすみなはのひとすちにと云引哥也

【二三】

宰相はかくことさまに思ひつゝくる心のうち／をは知らす今はわか物にこそとこめすゑ見るへきと思ふ／にいとわり
なくまとはれし心はすこしゆるひ右の大殿の／君の又も例ならぬさまを心くるしけになきて例のわり／なきほとに

身のありさまをも世のうれへをもことつ、けても／えいひやらすた、うちなけきつ、／

さま宰相／にちきりしらるゝ身のうさにいと、つらさをむすひかためそ

冬の夜ふかくねはさひしなといひまきはしたるさて／しも女君の有さまのあてにあゑかにいみしうなまめきたる／
哀をさしあたりて見る時はもとより心さししみにし／かたはいとたくひなくあはれにて中納言たにさてこもりゐ給ひ
／なは此人をもなにかはつ、まんさてこそは見めと思ふ／かねこともむねつふれてうれしういみしきにひたり
右の／袖ぬるゝこゝちしてつらしとまで思ひよられける我身／もうらめしかりければわりなうかまへつ、行あふへか
めるを／中納言はされはよたゝかうそかしたはかりうれへかけつと／ならはひとへにいかなるへきことそなと思ひな
けてもあらず／さてしもあなたさまに深き心のあやにくにそふへかめる／よと思ふはうらめしうもあれとそのまゝ
にうらみ／いはんも人わろくよつかぬこゝちするに思ひしのひつ、／さらぬかほにいみしくものなけかしきまゝに
こゝちも／なほるともおほえす

(26丁オ～27丁オ)

【二四】

十二月つこもりかた殿にまゐり／給へれはおほかたはさはかしけれと夜のまのへたても／おほつかなくおほしめした
る御心なれはいつしかとまち／よろこひまもりきこえ給ふにあまりさかりににほひ給へりし／かたちのいたうおもや
せてうちしめりてさふらひ給ふを／むねつふれてなといたくそんし給へる猶こゝちのあしきに／やとのたまふわさと
くるしと思ふところも侍らねと例／ならて久しう侍りしなこりにやときこえ給へいとおそろ／しき事いのりをこそ
また／はしむへかりけれとてさる／へき人さめして御すほうまつりはらへなとすへき事／のたまふを見きくに哀か

くおほしたるに跡はかなく／きえうせなはいかばかりの御思ひならんと見奉るにえ／ねんせすほろ／と泪のこほれぬるをもてまきら／はせと袖にあまれる御さまをつく／と御らんして／むかしよりあやしうおもはすなるさまともを身のやくと／思ひしには命もつくるこゝちしき今はつかさどきは／めてましらひ給ふきはに成ておほやけわたくし人にほめ／られめいほくありはか／しからぬ身のおもておこし給へは／そのなけきをもなくさめてさるへきにこそありけめと／うれへをやすむるきはにかうのみ例ならずこゝち／あしけになるよりももの思ひなけられたるけしき^(五)の／見ゆれはいとこそわひしういけるかひなければとてうち泣／給ふにいとたへかたう悲しくて何事をかは思ひ給へん／みたり心地の例ならず侍るをかくおほしさはかせ給ふ／につけても命さへ思ふにかなはず御らんしはてられすや／なりなんと思ひ給ふるはかりになんときこえなくさめて／ねんして御まへにてもまゐりなとすれはいとうれし／とおほしてもろともにきこしめす母うへは中／いとあら／しくていかなる事をも見とかめたまはす／

(27丁オ―28丁オ)

二五

年さへかへりぬれはひつしのあゆみのこゝちしていつ／まで有へき身そとおほせは正月には御車下すたれ／しちなとまであたらしうきよらかにすいしんなど迄／色をとゝのへさうそくともを給はせたる御みつからはた／さら也うへの御そしたかさねのうちめまで氷とけたる／池のおもてのことかゝやきたるにもてなしもよいいとゝ／心をそへてまつ殿にまゐり給ふて殿うへ拝し奉り／給ふ御かたちのひかるはかり見ゆることしはつねよりもいと／いみしと見奉り給ひてこといみもえしあへ給はすうちに／まゐり給へるに見奉る人ことに目をおとろかしたり宰相の／中將も人よ

りことなるさましてまゐりあひて見るにかはかり／にてましらひそめ世のおほえ有さまのかくもてなされ／たるに身をかへにくからむやとむねつふれて目をつけて／見れはいとおほかたにもてすくよけなれはゆきあはす／内侍のかみの御かたにまゐり給へるに殿上人かたちめの／あまたさふらはいてゐもてはやすもいまはかやうのまし／らひはしたなくくるしけれといか、せん宰相にひはそ、／のかして梅かえうたひたる聲もいみしうめてたし／宰相は此人にうつろひてなくさみにし心なれと猶淺／まじう心つよくてやみ給ひにしと思ひ出るにむね心しつか／ならてまかてぬ中納言はせちゑことにまゐりいとまめやかに／よろつをつとめ給ひつ、ちんのさためなにとし老やんこと／なきかんなちめなとよりも只此人のいひ出給ふをかしこき／事におほしよに有かたきおほえ世のきはなり

(28丁ウ～29丁ウ)

【二六】

その年／の三月ついたち比花さかりつねよりもことなる年なるに／南殿のさくらの花御らんしはやさせ給ひ世にありと／ある道／のはかせともめしていみしかるへきたひの／こと、心をつくすその日になりて題給はりてふみとも／つくるに中納言つくり出給へるすくれて猶名をえたる／はかせといへとつくりおよふなかりけり此世には更にも／いはすもろこしにもかゝるたくひなかりけりとうへを始／奉りすんしの、しりて御まへにめしてさるへき人々を／さしわけて御そぬきてかつけさせ給ふおりてけしきはかり／ふたうし給ふかたちようい有さまいつよりもすくれてめて／たく御らんせらるはなのほひもけおさる、やうなるを見る／人なみたをおとすまして父おと、はあはれか、りける／ものを我思ひなけししにおほかたは誰かはしる人の／有けるかくてもけによしありぬへきことにこそ有けれと／見

給ふに御よろこひの泪ましてことはりなりや右の大殿／はた更にもいはすふた所の御心のうちのうれしさおとり／まさらさりけりくれ行まゝに御あそひはしまるに中納言／又やふきたつへきかはとおほせはをり／の御あそひに／しふりかくしつる音を心にいれて吹たてたる雲井を／わけてひゝきのほりそゝろさむくおもしろき事いはん／かたなし

(29丁ウ～30丁ウ)

〔二七〕

さま／けうつくしたるさえ有さまはすへて此／世のものならすあまりかゝるはえやなかからさらんとゆゝ／しきにうへいといみしう御心ゆきときありてさらても／此人はつかさ位ともしかるへきやうもなきにけふかくよろづ／すぐれたらんしるしあらんこそ我心さしのしるしならめと／おほしめして右大將のせんしくたさせ給ふ宮の宰相も／いと人にすぐれたるをおほしめして権中納言になさせ／給ひつめいほくあるうれしさなどはよのつねなりや／大將のせんしうけ給ひて夜にいりて父おとゝ右のおとゝ／引つゝけて出給ふ近衛つかさのかくしてまちむかへ奉る／そゝろさむくめてたきにつけてあはれ我心ひとつこそ／人にたかへる身となけかしさの絶る時なけれおほかたには／かくきら／しう成のほりゆく身を跡はなくなり／なんことよなとかゝるにつけても心ひとつはかきくらされ／もの悲しさもしり給はす大殿やかて引つゝき右の大殿に／おくりいれ給ふをまちうけ殿のうちのゝしりよろこひたる／さまそきさきにたちてみたまはましにもまさりてうれし／けなる権中納言は我身のよろこひも人にすくれて／おもたゝしきは只世の人の成のほるにつゝきたちにし／いとほしさはかりと思へはさしもよろこはれすいみし／かりけるかたちさえのほとかなかゝる身をもてうつもらさん／ことも我になりて思ふにかたしとよますから思ひあかして／御よろこひ

のことなとかきて／

宮の中納言

むらさきの雲のころものうれしさにありし契や思ひかへつる

うちと御よろこひやなにやとさはかしけれと我心ひとつ／には中／心つくしにおもひみたるゝをりなれば心／おくめるもおかしうあはれにて御よろこひをこそこれ／よりまつと思ひ給ひつれとて／

右大将

ものをこそ思ひかさぬれぬきかへていかなる身にならんと思へは

とあるをおほしけるまゝにことほりに哀なるにいろめかし／きはよろこひもおほえすそうちなかるゝやよろこひやなに／やともてさはかるゝにいとゝひまなくてゆきあふことかた／けれと月日をかそへつゝわかものとなるへきそかしと思ふに／わりなき心をなくさめすくすに

(30丁ウ―32丁オ)

二二八

大將は身の所せくなり／ゆくまゝにけに猶すてかたき身といひなからかくてある／へきならずと思ひいと心ほそくてうちなとのとのゐかち／にさふらひ給ふに権中納言もまゐり給ひて例のやすみ／所にゆきあひてかたらふをしのひやかに人のかへりこと／をそかくうちけしきはみてとらすめるかくせはへたてかほ／なりかくさねはいとほしく思ひわつらひたるけしきを／右の大殿の君のなめりとしるく見ていたかそ見んと／いふにいはんかたなしと思へるおかしさにたはふれてひき／はひたれは露もへたてかほにはと思へはえも引かくさす／えもいはぬむらさきのかみにすみうすくあるかなきかの／かきさまたかふへくもあらず目のまへのうれしさをそ／思ふらんなといひやりたりけるかへりことなるへし／

うへにきるさよの衣の袖よりも人しれぬをはたゝにやはきく

とそかきたる見るに猶まはゆければあまりうす墨にて／なにともこそ見えねたかそよといひまきはしてさし／やりたれはあまえて何事かあると思ふいさたとくし／くてえ見えすとてやみぬ心のうちには男も女もたのもし／けなきものは人の心かな此女君^見みるめ有さまはこめかしう／あてやかに物とほきなからかくこそはものし給ひけれ／うち／の我心こそいかゝはせんに思ひなさるれよその人／きゝことの有さまわかたみしきことなりやましてよの／つねならんなへての人の心いかならんと思ひやるにいとうけれど／今さらに何かは露もものしけなるけしき^気を見せんと／おもへは女君にはかけてもけしきもらさず

(32丁オゝ33丁オ)

【二九】

此月はかり／こそかくてもあらめと思へは殿に日々にまゐりとのお／なとしつゝとし比かくてはあれとかんたちめ殿上人などに／ことなる事なければ目見いれものいひふるゝこともなき／をあたらいみしうおはする人の人を人ともせずものとはく／上すめき給へるなどそれはかりをそなんに思ひきこえたり／つるをなさけなからぬほとにさしいらへなとし給ふそいとゝ／人の心つくしなるやうちの御とのゐなるに廿日あまり／の月もなきほとやみはあやなしとおほゆるにほひにて／五せちの比なへてかた木のとありし人をおもひいてゝ／殿上人なとしつまりたるにれいけいてんのわたりをいと／しのひやかに立よりて／

冬^{右大将}や見し月のゆくゑをしらぬかなあなおほつかな春の夜のやみ

とすゑつかたおもしろくうそふきたるにふとさしよりて／

見^女しまゝにゆくゑもしらぬ月なれはうらみて山にいりやしにけん

とこたふるありしけはひなりものゝ心ほそきにわさとさしすき／たりしもたゝならすさしもやはと思ひつるおなし心
なり／けるもすくしかたくて立より給ひぬとそ／
(33丁オウウ)

【頭注】

「やみはあやなし」――引哥／○春の夜のやみはあやなし梅花いろこそ見へね香やはかくるゝ

「なへてかた木の」――○前に見ゆるなへてかた木のとよみし哥也

後遊紙ナシ

(以上、第二冊)